『他力信仰録』より抜粋

80　学問や理屈

学問や理屈では絶対不思議の親心は判らない。

私が信仰に苦しんだ時にはお聖教を集めて有難い処をどれだけ読んだか知れないが、頭は承知しても心が納得してくれなかった。　願力の不思議が只で助けて下さるとはよく判っていても気済みがしなかった。煩悩が起らば起れと捨て置いてと言われても、燃えている心を他所に見ている訳には行かなかった。胸に手を置いて考えると益々判らなくなり、疑うてはならないと疑うのだから仕方がなかった。

自分の真実の機様が照らし出された時には、学問も間に合わないが理屈も駄目である。総てが間に合わなかった時、総てが間に合うた不思議の境地に立たされて踊躍歓喜したのである。

だから普通一般に、「堕ちる者をお助けと信じたらよい」と単純に考えていられる方々は、口の先だけの堕ちるものであって心が堕ちていないから助かった自覚がない。よくよく其の人の心を探って見れば　他人は堕ちても自分だけは助かるのだと心得ている。心得たのでは不思議ではない。不思議でなければ絶対他力の信仰ではない。